

第6回

藩校興讓館の跡地
(中央二丁目)

今回は、中央二丁目(旧元細工町)の藩校興讓館跡地を紹介します。興讓館が開設された場所で、その一隅に「藩校興讓館跡地記念碑」が建っています。

元の学問所を再利用

鷹山は、改革推進のためには政治を担当する武士の教育が重要として、学館(藩校)の設立を進めました。経費節減と、鷹山の「新たに取立つるより、廃れたるを興すは、人情いつも平なるもの」との意向から、元の学問所を再興する方策がとられました。

元の学問所は、4代藩主上杉綱憲の時のものです。元禄10年(1697)、元細工町の矢尾板三印(儒医)の屋敷内に聖堂と講堂が建てられて講義が行われました。三印の死後は儒学者・片山元儒が管理しましたが、講義は中断され、代々片山家の屋敷となっていました。

まず片山家を隣屋敷に転居させ、講堂と聖堂を補修し、塾長の住居、諸生(学生)の住む学寮(寄宿舎)、台所・食堂などを新たに増設し、安永5年(1776)4月17日に落成しました。アメリカ合衆国が独立した年です。

師の細井平洲が

「興讓館」と命名

諸生は20人、上級家臣の子弟が主でしたが、下級家臣の優秀な子弟も選ばれました。平均年齢は25歳程(数え年)でした。3年間寄宿して勉学に励む一方、通学する生徒に素読(漢籍の読み方)を教えました。諸生には食事と年1両の手当も出ました。

学館の名は、鷹山の師・細井平洲により「興讓館」と命名。「讓を興すとは恭遜(謙讓)の道を修業させること也」と、政治中枢を担当する上級家臣に恭遜の心を身に付けさせ、民衆を思いやる政治を目指したものです。

友于堂や好生堂も増設

開校後は次第に通学生が増え、寛政8年(1796)に通学生のための校舎・友于堂を隣の片山屋敷に増築、片山家は再び隣に転居しました。文化3年(1806)には医学館の好生堂も構内に移り、総合的な教育機関に発展しました。幕末頃の最盛期には、通学生が千人程に達したといわれています。その後、元治元年(1864)の小森沢大火で興讓館は類焼し、門東町の武芸所内(現在、新文化複合施設建設中の場所)に移転新築されました。

お雛様みたいに きれいになってね

2月17日、待ち遠しい“春”を探していると、児童会館で雛人形を見ている“イクメンパパ”に出会いました。「会社が休みなので、娘と2人で遊びに来ました」とのことと、お子さんの名前は心春(こはる)ちゃん。一足早い“春”を見つけた瞬間でした。

表紙解説



記念碑は平成20年に寄付を募って建てられました。右側の石柱は、以前の「旧藩校興讓館遺蹟」の碑です。



窪島政男(紫陽)筆「興讓館之図」上杉博物館蔵

